

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2019.10



創刊 理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきました大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一一〇一九年十月号（通巻七三七号）

香川師つれづれ 4 一万石と二万石 佐久間晟
私と短歌の出会い (206) 佐川久光

◇今月の二十首詠……西安の月

許田邦子 2

■歌壇月旦
高校の国語が変わる
藤田美智子

■作品[A]
佐久間晟・椎名恒治他 4
斎藤順子他 20

■遊覧寄港〈小畠弘之著『タネをまく細文人』〉藤田しん子
坂本佐和子他 56

70

酒井治子他

◇シルクロード・カフェ―― (責任編集) 木村文子
須川千恵香・川崎百合枝

69

森ヒロノ他 86

第一歌集の頃
送風塔
泉嘉穂子・中村博子・河野繁子

70

■オリーブ集

中須賀美佐子・永田進一他 46

■八月号作品批評

71

◇今月の二人

山野みなみ・藤岡みゆき 16

A……松浦禎子・大浪美雪

72

■金近敦子歌集『東から西に』 批評

38

B……田土才恵・西堤啓子

73

憧憬が招来する世界

香川哲三 38

C……柴田登志恵・庄司菊枝

74

東から西への広がり

上條節子 38

藤原勇次

75

底流にあるもの

藤谷道夫 38

心の鏡

76

■大久保閨子歌集『風をたずねて』 批評

42

最近の歌誌より

77

河内の梅は咲いたのかしら

養学登志子 42

支社・グループ掲示板 (昇グループ)

78

楽しむことを知る聰明さ

久我田鶴子 42

クリップ……104

79

香川進の生きものの歌

12

田土成彦 14

神田通信……表3

80

(表紙デザイン) 田中義和 設計

西安の月

許田 邦子

幸せに暮しているかさくらんば送りくれにし教へ子何処

自らの心見極む中三が忌憚なく言ふ「恋愛したい」

上海で待つこと長く満月の夜更けたうたう西安に着き

遙かなる阿倍仲麻呂望郷の愁ひを照らす西安の月

一言へば十知る聴さ退屈に思ふ授業真剣に聴き

汚れなき心の証教室に拾ひし百円届け出で来ぬ

城壁のマラソンコース歴代の首都でありし日刻まるる街

ここしそがシルクロードの出発点堅固に建つる西の城門

昭和二十五年、沖縄県生まれ。
宇都宮市在住。
昭和五十四年、新聞投稿が縁で
桃原邑子に師事し、地中海に入
り、「沖縄の会」所属。

どこしへに制御は不可か雨雲の一閃太く光る稻妻

猥雑さ消えて西口池袋線路ばかりが遠き日のまま

一キロで四・二元 道端に商ふライチー安南の産

珍しき餃子つきつぎ並べどももつたいなくもおほかた残し

銀河系億万光年瞬けりいつか見つけむ命ある星

鉄砲百合まことの名前忘れられ草に気高きリュウキュウユリは

長恨歌音に聞こゆる華清の池貴妃の墓へは詣で得ずなり

迫真の兵馬俑軍將軍の美髯凜々しく威厳を保つ

地下深く塑像八千軍団が永遠に守れる始皇帝陵

始皇帝の暴虐偉業凄まじく尽きぬ議論の毀譽と褒貶

中国の基の諸々統一の秦こそまさにチャイナの語源

皇帝の権威は褪せず墳丘の地下宮殿に眠りたる今

作品 A

佐久間 晟 日乘（二六）

・湾

快いひびき、時には急に聞こえる何か。ああ空耳か
歌に繰り生き来しからには五六冊の歌集を出して置くべきだったか
今更に悔いは無けれど歌集とは他人の為に出すべきものか
愚に生きしわが一世の夢さを思いつつ今日も生き永らえる
この辺で終わりにせんと思えどもなかなか死ねず今日も花咲く
秋の山ゆたかに紅葉の色の冴え行かねばならぬ国を思えり
いすこへと還る土地など見当らず死後の世界のただに虚しき

椎名恒治 桜が見たい

・橋

薔まだ固き木の下杖止め見上げてことしのさくらがみたい
週に二日のディサービスさへ怠らむと窓開けて空の風を入れつつ
西空に傾きてゆく太陽は富士の影を雲は追ひつつ
西空の遠く遠く富士の姿 雲に隠れむとす時は移りて
老いたりし妻より老いしわれ老いて引きする杖の四本の爪
電流を流す道具ばかりにてわれはおたおた暮らし居る
夕暮は向うのビルの屋上に集まり来たり静まる数羽

坂上直美 吟子先生

・天

あれこんな小さな体の人だった介護施設の吟子先生
カーテンの閉ざされた中の談話室あけちゃいけない？季節が見えない
厳しくて有名だった吟子さん優しくなられて少し寂しい
吟子さん「きれい」と言ってくださった真っ赤な服で行ってよかった
おしゃべりをしなくてはだめ挨拶はもちろんのこと人であるため
もつと会いにいかなきやいけない吟子さん遠くに越してしまったけれど
吟子さんおいでではないが歌会にお邪魔してます毎月のこと

坂出裕子 山鉾

・洛

子と孫が祇園祭に行きしとふ囃子の音の耳に湧きくる
屏風祭、宵山、山鉾巡行よ 思ひ出さるる遠き夏の日
祭りとも浮き世ともはや縁遠くなれるこの身と思ひをりしが
子と孫がたのしみめぐる山鉾の映像見つつ我もたのしむ
千年を越えてつづける祭りとぞ知ればひとしほこころはづみて
共に見し人の思ひ出コンチキチン祭囃子によみがへりくる
おのづから浮かび来るなり思ひ出の 祇園祭のただなつかしき

鈴木結志

顔真卿展(三)

・福

高尾恭子

越前鉄道

・大

すきのなき点画の配置凜としてこころひき込む鷗陽詢の書
虞世南書とう孔子廟堂碑文字優雅なる氣品を保つ

一休の書の筆力の渴筆にこころひかれて離れがたしも
うたを詠む懊悔の一つ自らを筆に浄化しこころを正す
わが心ゆさぶる變化躍動の褚遂良の書師とし見習う

張りのある趙玄祥の經文字にひかれひたすら臨書に励む
ふくよかな線美あふる王羲之の書は手本とし今に息づく

閻根榮子 苦あつく

・埼

柚子の花白々こぼれかすかな香りは湿りし土よりたてる
晴れ間なき日々の統けば柚子の木に今年は揚羽のくることのなし
軒すだれ一枚下しが雨の日の統きて早も巻き上げており
小さな石灯籠の苦あつくここにも長びく梅雨のあかしは
「よしつ」と言い朝食の席より立上がるこれより始まる一日のため
風少し吹きくる頃か外に出て真夏日の夜の満月にあう
足もとに椋鳥の雛の寄り来しが心残りに森を出でたり

閻根和美 ウッドデッキ

・埼

十葉を摘まさざるままに夏土用もつさもつさと葉がそりたつ
夫と子の汗と手になるウッドデッキ葉草干したりお茶を飲んだり
腐りたる板のはずされコンクリのテラスとなりゆく二十年経て
としかさの職人ほどにきびきびと木べら動かし生コン均す
いちじくの葉かけに一服するならん煙草のにおいのただよい来たり
「たばあこの煙のなかあで」久々に口をつく唄五輪真弓の
門口に提灯つるさん新ぼとけ二人なるも一つでよいのでしょうか
ぬ

高津砂千子 土用干し

・風

炎天下塩漬けの梅干してゆく今年も生きのあかしとなさん
五百個の梅のかたえに仰ぐ空今夜は多分雨は降るまい
ふたたびを三度を起きて庭に出てふりあおぐ空星のきらめき
ちちははに加えて姉も星となり夜つゆを浴びる梅みているや
寝不足はいとわずラジオ体操す土用干し終え心のかろく
三日三晩干して身軽くなりし梅ひとつひとと麿に戻しぬ
水あがるを待ち好天の統くをも待ちてようやく梅干しとなる

滝田靖子 蓼の台

・新

真夜中の伯母の死を知る寂しき夜にありしと語らふ朝に
青白く冷たき額に触れてみる九十四年の詰まりし身体の
永訣と知らぬ幼がバイバイと無邪気に手を振るばあばバイバイ
夏服の白きラウスの少女るて喪の群れの中光を集め
残しゆく希望のひとつ制服の少女は顔を上げて立ちたり
かかる時しか会へないと言ひ合ひて葬儀の間を眠やかにわれら
今生の苦い記憶を脱ぎ捨てて連の台に微睡んでるよ

VISAカード一枚もって旅に出る小さき地名を拾い読みつつ
揺りかごにゆられるように一両の電車ゆるゆる点線つなぐ
「えち鉄」の呼び名ゆかしく無人駅を過ぎてまどろみまた無人駅
恐竜が棲んでいたとか虫籠をもった幼の声とおさかる
新米の仲居がメモを読みくれし加賀太きゅうりのあんかけの椀
さみどりの苦の参道しんしんと時の狭間に迷い来ぬらし
真っ直ぐに生きよ千歳を伸びきった杉の木末のさみどり眩し

竹下妙子

月の光

霧

玉井綾子

那朝の青空

・羊

梅雨ぐらき櫻の林に舞へる蝶黒揚羽らしいづ邊へ消えぬ
 こぼれ種一樹となりて花を持つ白さるすべり梅雨明けの庭
 黒蝶蛉のたたみし羽をゆらしつつ山肌ひく風はゆくなり
 ひと夜かけ屋根にのばらむと青き蔓のうせんかづら何を夢みる
 レモン切る庖丁よりしぶき上ぐたまゆら光きらめきてをり
 甘やかに匂へるものこのろびゐてうぶげもちかる赤・白き桃
 月の光さびしきまでに差し込めばひとり厨の桃の香は立つ

田土成彦

銀河団

・宙

それがどうしたといふのか銀河団五十億光年の空漠

寝ねがたき夜のほどろに始発車のすぐる音あり時惜しむこと
 やうやくに大和川橋梁にさしかかり四ヵ国語のアナウンス終ふ
 いましがた開ける蓮のはなゆれて天空をふく風かすきゆく
 ロンギヌスの槍と血を受くる聖杯と世俗の間は深まるばかり
 チターひとつアントン・カラスが紡ぎ出す光と影と愛と生死を
 広大な都市地下水路ひたすらに逃ぐる男の靴音孤独

田土才恵

産直の店

・宙

美作の地名に湧きくる思い出を頸たせる産地直送の店

産直の店に天麩羅蕎麦を食べかぼちゃの黄の花ゆりの白きも
 二人して食む一切れの水羊羹甘さ染みたる頃合いとなる
 四家族怒濤のごとく集うまでこころせわしく汗ぬぐい待つ
 日を追いて家族集まる日の迫り一人せかせか家うちめぐる
 拨らぬ整理整頓いまさらに膨張したる物の嵩ばる
 遠花火さえも見ず遺る夏の日に弾けるほどのことは起こらず

旅ごとに着るお気に入り 海が言うスクエアネックはもう似合わない
 アラマンダ、ハイビスカスの映える島ネクタイ・スーツは外来生物
 海に生う虹の頭を押さえつけ弧を引き伸ばす那朝の青空
 那朝の虹 赤、オレンジ、黄、黄緑に緑、青空 紫はない
 マンホールのふたの上だけ濡れている夢でなし台風のマークシング
 早回しのよう木が揺れ空が飛ぶガラスの向こうに他人の台風
 梅雨葵 二泊の那朝より戻る吾にハイビスカスの顔をして立つ

虎谷信子

天神まつり

・伴

大川の夜空いろどる 祭り花火。師も観給ふや、とこ世にありて
 天神まつりに 関係ふかき近江屋は、師のふるさとよ、間口の広し
 祭り日は師の供をしてにぎにぎと、退空会の二次会だのし
 天満宮にての夏期講座なる案内いただく今にしつづく民俗勉学
 「履正社」が高校野球 大阪代表なり。履正の意 初めて知りぬ
 御陵の白鷺あまた 降りて来て、青田に遊ぶも 昔語りと
 夕立のすきて 蝋の声たち来。盆提灯を久びさにつるす

中島央子

湿度の国

・森

うすぐもる湿度の國の若緑丘の竹叢風にふくらむ
 不動尊まつれる傍へ湧きいづる滝のめぐみを家苞にせむ
 はつなつの緑沈める滝壺に主やも二尾のドイツ鯉棲む
 膝つきて飲むひと掬ひの岩清水ここより発ちし虫のあらむ
 「佐原駅」白く染めぬく藍暖簾 令和初年の風にゆれつゝ
 残りたる花といへども豊かなる一本あやめの古代むらさき
 燃酌の「ちらんほうたる」並ぶ店に五十年ぶりの友と語りぬ

中島義雄 記憶

・岡

ばかりょうこ

勿体なきこと

・鹿

切れ切れの記憶のことく沙羅の花舞ひ落ちて梢のみが明るし
三年が来たよと咲く妻の声湧きくる墓を平手に洗ふ
働きて荒れしその手もすべすべと白くなりしかその墓洗ふ
眼に遺るかけがへのなき表情は三人子産み終へ誇りたる貌
恋ふこころ淡くなりつつ鈴虫が部分ばかりの思念を煽る
亡き妻が穫りきて我に食ましめし無花果を嫁が穫りて供へぬ
落としたるボールペン拾ふ床のうへに部分月食の月が来てゐる

永塚節子

夏

・銀

もじすりの一粒の種知らぬ間に運びくれたる小鳥のおりし
もじすりの花咲く頃にもし逝かばわれに一本父へ一本
多年草なれば来夏も咲きくれよもじすりの花数を増やして
道のべに青柿ひとつころがりて静まりかかる梅雨明け三日
くきやかに時の移ろい示しつつゆっくりゆうすげ開く
朝には閉じるゆうすげ然ればこそ夜を通してゆるる黄の色
ゆうすげの花を添えたる酢の物のひときわ涼し夕餉の食卓

白子れい

今宵七夕

・洛

濃みどりの葉を茂らせて重おもと枝垂れ桜の枝地に届く
貴船川のせせらぎに沿い登りゆく去年ともに来し人偲びつ
貴船神社献茶の儀式おごそかに今進みおり息のみて坐す
料亭の部屋の格言仰ぎつつ茶の客待てり貴船のひと日

ふたたびを三たびを出でて仰ぐとも天の川なし今宵七夕
年一度の逢瀬失い織姫のこころはさぞや
わが若き日を

吉へりて凶のふえくる身のめぐりなべて受け留め明日につながん

浜谷久子

ひと粒

・地

種落とし季を違えずに発芽する真青の厚葉ツルムラサキの
いっせいに芽吹くコスモス満開となる日はもうすぐ種つけるため
ひと粒の種紛れ入り露草の大紫と咲いて咲き継ぐ
馬鈴薯の畑の中に一本の向日葵の咲く種はどこから
ひと粒が細いち面の花となる予感も向日葵一輪大輪
ひと粒の記憶の深さ時を待つ眠りを覚ます声のたしかさ
真盛りの夏を嵐の勢いに波打ち乱れ繁る草木

浜本芙美

白き幻想

・夢

咲ききわむ大輪のばらの危うさを今日か明日かと目守りていつ
店じまいの売出しの日店主の勧めくれしブランズ重宝している
蘿草の苞立ち並び青空へ一齊に翔ちゆく白き幻想
遠き日に「お花壇」選びくれし友人の死を憤みて
「景子さん」という突つ支え棒のありてこそわが日常の守られている
連日の極暑にカラスの声きかず森の何處にひそみておらん
紫蘇ジュースのみをくだりゆっくりと胃の腑を紅に染めゆくならん

眼底に腫瘍ありとうオペせざれば見えなくなると淡々と医師
手術には勝負服を着る向日葵の激しき色ではじき返そう
体中が水を欲しがるオペのあと水死体のこと溺れておりぬ
病むうたなど詠むものかと逆らえど体中が叫ぶ心が叫ぶ
亡き奈々のゆめかまぼろし添い寝して見守りいたる集中治療室
わが家は七夕ならず 西・東 別れて病舎 逢瀬のならじ
くさぐさのお命をいただき食ひたり罪ぶかき身には勿体なきこと

檜垣 美保子 木

・昂

朝まだき鳥は樹上に「か」の音を連打して鳴くさばさばと鳴く
食卓の配置換うればのぼりくる夏の朝日を真っ向にして
左耳波の音に洗われてみのり知らずゆく島の道
ゆれているひかりとかげのそのなかにむらさきは立つ花のすがたに
戦争の遺構の井戸の湧き水は百年涸れず手をひたしたり
ペランダに「幸福の木」「金のなる木」ふかき緑に日のかける午後
くれないのうすき一部をぬぎすてあたらしき葉をふやすゴムの木

福田 庸子

山百合 今

しめりもつ今宵ひらけり山百合の香に積もれたる記憶のありて
一齐に山百合ひらく宵となり我をつむも濃き香のままに
徒長せし栗の梢をゆく雲にのぞく青空夏の入り口
三倍の高さとなりし栗の木の充ちたる時間我もありしや
南の遺伝子を持つ小賀玉は樹高伸ばせり暖冬受けて
通学路と記さる道両側を野萱草ひらく田の風受けて
上空を舞ふ白鷺は知りてをりをとり鮎に寄る魚影濃き瀬を

藤田 美智子

縹色 新

路上にて転びたるわれを起こしたり遠巻きにする人の視線が
奮ひ立たむことありやぶるるんと音立てて一羽の雀飛び立つ
道ばたにひつそり咲きてゐるものへクソカズラなどと名づけて
刺さりたる言葉がひとつ葉は棘に姿を変へてゆくこともある
声の大きさが押しの強さになりたるらし会場を出て早足になる
故郷に帰れぬ人の焼く皿に予期せぬ縹の色が生まれる
こんなに笑ふ人だつたのか避難先に窓を開けて八年が経つ

藤森 己行 虫

・銀

「益前の虫は殺すな」祖母の言葉突然甦る梅雨明けの朝
新聞紙丸めて思ひ切り蝶を打つ一茶の心境になれぬ我なり
ミニミ殺め蚊を叩きつぶす殺生を犯してしまつた庭の芝張り
我的血を吸ひに来たれる蚊に向かひ殺虫剤を一発噴射
年老いて固くなりたる我よりも蚊よ若い人の柔肌を刺せ
夏休み自由研究の思ひ出は野山を駆けた昆虫採集
枯の木の樹液に寄り来る甲虫取りに通つた少年時代

船田 清子 水無月の満月

天

水無月の満月わが眼に三つ巴黃金の車首筋めぐれ
ぱつたりと雨を含める大輪の青きあぢさゐ つひに逢ひえず
しかたなし 鹿など無視して花柄のTシャツ引き出し華やきてみる
梅雨明けも報じられぬに熊蟬の新生の歓喜高らに空へ
車の窓開くや雪崩るる蟬時雨公園前なるみどりの道に
梅雨明けなど待てぬとばかり地上なる自由と光恋ひ出でたる蟬
七年余を地中にいのち蓄へて地上の七日種のために生く

牧 雄彦 ガマ

・大

糸満の町しづかなりさんさんと三月の日が家並にそそぐ
晴れわたる南の海はかがやきてうなさかをゆく船はまぼろし
二十余万の死者のこゑ聞く思ひせり沖縄の果夕づく海に
風もなく湿り帯びたる渓の底ガマはひそかに暗き口開く
急な崖くだりて到るガマの中果てし人らの無念を聴かむ
沖縄の戦に死にし無事の民その声ガマに満つるおもひす
このガマに苦しみ果てしはいくたりぞ頭を垂りてしばし動けず

松浦禎子 バンテオン

・羊

宮本靖彦

ユーカリの森

・凌

二千年前のファサードに刻まれし建設者アグリッパとぞ心にきざむ
古代ローマの神々納めし壁龕をそのままにして魂残す
わが腕をつかみて教会巡りせし息はうたた寝すパンテオンの椅子に
主祭壇の燈明まで進みゆく大理石の床滑らぬよう
パンテオンの天井にうがちし丸き穴そこより覗く二千年前
ローマ帝国その裔の人々とゆき交えるえにしの不思議でこぼこ道を
うしろよりリュックを開ける掏摸もまた混じりいてローマの石畳ゆく

松永智子 空

・嵐

衢の音絶えし夜のふけ待つとなく障子にうつる月のかげ待つ
窓ごとにともる灯火みてあるにひとのことばをきかず夜のふけ
音荒く車の停まりそののちの間また深しふけゆく衢
待つことのあはきかなしみ夜ふかく十七夜の月のぼりくる待つ
闇ふかき衢を夜すがら照らす月うす雲かかりかたぶきゆく見ゆ
あかときの雲みてあれば窓ちかく一羽のカラス鳴かず飛び去る
雲のなき朝の月かげ明けてゆく空のままり消えてゆくらし

三浦好博

意氣地

・銚

挨拶を拒否するやうに目をそらす人に意識し寄り行きにけり
合歛の花に黄揚羽あまた集まれり梅雨晴れの朝の歌垣ならむ
のびやかに森より響くみんなの般若心経の声と響かふ
近頃は「鈴愛」のやうに両方に付け耳をしてテレビに向かふ
張り切りてうたを作れる半夏生ちひろカレンダーに長靴の子ら
嗅覚が次に聴覚次に歯が駄目になりまだ目が見えるなり
國賓にデモする國の羨しもよ我はからきし意氣地がなくて

御代田澄江

七月の空

・茨

夏空へ高く朱色の花を掲げ吾を励ます麥香花
もの言はず只そこに咲くそれのみにて生くる力をわれに與るるも
妹の電話の声の明るくて胃カメラ検査の医師を称へる
全く痛くない本当に上手ダンスの生徒たちにも勧めたわ
毛の長き外来種猫のつそりと庭に来てややありのつそり戻る
自己責任格差容認の若年層が政権支持すと心小暗し
友と君百歳まで生きよう短歌会また来年もこの席に来て

暗き森影絵にのこしブリスベンの冬空ゆるり北より白む
掌のうへの瓜のたね食むレインボー鳥中味を食べて骸のこし去る
抱っこするコアラの体重やや重く撮られし写真の吾がえびす顔
巨大なる蝶の白羽根重ねたるシドニーオペラハウスに別れを告ぐる
ユーカリの巨木の樹海白色の電柱の森歩むにも似る
ブルーマウンテン行き交ふ旅人おほかたは亞細亞人なりアジア端の地
ケーキ箱押せば皿へとなり変るシドニーに見る紙の他用化

三好聖三 空想譚

・伊

パタゴニア午前3時の映像に乗って遊べる空想の譚
マゼランの姓をいただくキツツキが朽木を穿つ騎士のように
赤騎士の異名与えし啄木鳥が南極山毛櫸の幹を啄む
大男ギアナ高地をまたぎ越し瀑布の水を飲みはじめたり

おもうだに不快な男あらわれて夢の街路をうつつへ返す

ふえふきの桃をいただき飯とする朝七月の甘味よろしく

おもさしの涼しき少女あらわれてみず落の束置いてゆきたり

茂木 熾 二千万円

・埼

山下雅子 病窓

・習

七月はじめの私のうれしかったことレッドブルホンダF1優勝
二千万円その貯め方がわからぬと歌詠むひとはもつと貯めてる
蔽蓋草、凌霄花、赤熊百合梅雨に咲く花みなオレンジに
北の地へ旅を誘はる何処にしよ思案の奥に雨竜沼あり
わが腕に一番乗りの蔽蚊ありすかさずたく朝の如に
令和元年兄弟五人無事にゐる吾は八十歳なんなんとして
宣長の逝きしは享和元年なり始まりし令和の「和」のコラボする

もとむらしげと

田舎者 東京へ

・そ

山手線に駆けこみ乗りし田舎者笛鳴りひびき電車が停まる
閉まりたる扉の外にのこされて肩かけ鞄は風に吹かるる
新宿の駅に着きしのち右往左往ひとに逢うまでの遠き道のり
階段を下りエスカレーターを下り地の底ふかき地下鉄に乗る
対面の席にうつむく人ありて顔を上ぐれば泪溜めいき
思いやり宙に浮きつつ空席を皆がかこみて一駅つづく
新津さんいすこにおらむ美しき空港をゲートの端まで歩く

八乙女由朗

盆が来る

・柴

吉永惟昭 当選

・熊

梅雨明けなば直ちに暑氣は襲いきて探せどあらぬ生きの抜け道
単純に生を置くべしわれは今体力注ぐ朝の一時間
夜明け前の外の空気を試し吸い朝にのみ出来る作業の時間
茫茫となりくる今日の暑さかな午前七時熱中症の入り口に立つ
本年は蜂に刺さるは三回目どじとなりたる証拠と言わん
子の頃より馴れて常なるものありて容赦なく来る地獄のとどろき
過ぎてはや母の三十三回忌吊灯籠にいろ紙を張る

深海の竜宮目さしかえり来ぬ友よあなたの沖縄忌迎う
羊雲のやさしく散れる窓の青の深みへ泳ぎゆきたし
院内の売店にひかる文旦鉢「元気出しなさい」母のささやき
夢うつつにやさしくかそけき声のしてわが腕さぐる笑顔はドラキュラ
ぴかぴかり病窓はしる稻光り音を連れざるひかりの乱舞
敗戦を終戦と称え七十四年忘れ得ぬ昭和のかの暑き日よ
寄り添うと首相また言えり静やかに民の手とりし陛下のお姿

横田敏子

エアコン

・福

白菜の一滴に今朝も日覚めゆくわれの身体われのたましい
快適なひと日を約束してくれる二十八度のエアコン始動す
隣屋のワンちゃん一人でお留守番エアコン付けて悠々自適
日本中の建屋のエアコン作動して列島さらに熱しゆくなり
眩暈して屋のベッドに横たわる夢に出で来よふるさとの湖
エアコンが無ければ生きてゆけぬ夏今日の命にビールが染みる
車のドア開けた瞬時の突風に髪逆立ちて阿修羅のごとし

父娘腐桃源境より羽撃けり 参議当選本田顯子氏
慈父も元参議の議員昭和より地中海誌の同人にてある

雪山を越えきし「あきこ」抱きくれし人らと押なな登院ボタン
四度目の正直が待つ天の川苦節九年が清楚に涉る

良識の府に戻すべき参議を胸張りて踏め赤きじゅうたん
ふる里や菜葉の貴重くあれど白亜の恋もまたよしとせん
ものなべて変りゆくさま参議院頭政譜歌詠み継ぎてゆく

朝井恭子 ブランコ

・森

市原やよひ 犬

・萬

文月を裏山に鳴く老鶯の声のんびりと「どうでもいいや」
御やしろの石段見上げ独り言つ上りは良い良い下りは怖い
「永眠」の文字の増えたるクラス会の名簿を閉じてしばし祈りぬ
亡き夫の机の上に取材メモとペン並びおりありし日の「ご」と
私も又八十路越えしとふるさとの弟電話にさりげなく言う
朝なさな食む目玉焼きいつの日か一つ目小僧に化けて出るやも
梅雨寒の公園に子らの姿無くブランコ唯に垂直をなす

磯田ひさ子

野球少年

・森

従兄弟の計受けて急ぎぬ雨しぶく米沢行きの電車に揺られ
高廻まで絡みし山ふぢ咲きてるし蔵王大会を思ひ出しぬ
山ふぢのふぢ色淨しつきに電車の窓に現はれて消ゆ
プロパンガスの支店任され米沢へ行きしが終の別れになりぬ
雪の降る冬の米沢の嚴しさをわれはひとたびも思はずに過ぐ
往年の野球少年の野辺送り町内会の人を集めて
わが知らぬ四十年を米沢の地に根を張りし君よあづばれ

市原志郎

ある日

・萬

いつもとは違う入口となっている燕の子数匹騒ぐ玄関
子燕の巣立つのはあと数日か時には姿の見えぬことあり

勤め先変りて今夜は帰り来ぬ息子と思う夜は寂しい
詐欺グルーピ暗躍をする世となりぬ貯えなき事をよしとす

広島に原爆落ちしは今日なるかあれから何十年我は生き来ぬ
連日の暑さを告げるテレビの前立ち上がるにも杖を突きおり
NHKをぶつぶす会という人の立候補する世の中となる

連れて行く犬には水玉の合羽着せ自分は何も着ていらない孫
夫の為作りし手摺いつの間に我の為にもなりて寂し
庭続きに息子家族の居るものを常にひとりと言う姉なりき
九十の姉の愚痴に備えおく言葉いくつを搜していたり
この夏の二度目のつばめの巣作りは我が家の話題の中心となる
カラスより逃れしつばめ揺らし行く夾竹桃の赤き花房
あじさいの青極まりて人住まぬ家を静かに包みていたり

大浪美雪 丘陵

・森

緑濃き森の奥より通りくるこげらの叩くトララララ ララ
椎の花もりあがりたる上総丘陵 裂波懸けにしてほととぎす鳴く
丘陵の仕組説けるもうわの空今年も聞けたトッキヨキヨカキヨク
丘陵のおちこち残る素掘りというトンネルの口みな五角形
崖穿ち川の流れを変えてまで造りし田圃放棄されおり
チバニアン地磁気逆転わからぬが澄みたる声に河鹿さわ鳴く
水浅き養老川の川底に弧を描き照る貝の化石は

奥田清和 笹かざり

笹かざり

・大

放課後に日毎通ひて木棺の発掘見たりきね山古墳
家屋敷売りて借家に身を寄せし父の口ぐせ腐つても鰯
鯉のぼり竿うち立つる地もあらず借家の隅にしまはれぬたり
三界に家なしと言ひし女性いま短冊ゆらし笹かざりする
ある時はわが師わが友われの弟子貝がら節の三味の音消えず
目薬のキャップひとつを探しあぐね一人の古い夜は過ぎゆく
ひたすらに炊事洗濯針仕事老いたる妻の夕やけこやけ

奥田陽子 蟲音

・羊

菊地栄子 水無月

・鷗

川岸に沿える路傍に植えられて花うつくしき散步道なりき
春を待ち芽ぐまんとする花花をある日草刈機の轟音の過ぐ
草刈機の均してゆけりばらとなしし水仙の飛び散れる青
額寄せて喚きいたれど草刈機の備えし理屈に及ばざるべし
草刈機數台の放つとどろきの瞬時爆撃に似るかと思う
美術館いすればふかき緑にて爆撃の絵の幻にあれ
いすこへと向かわん國か選択の日にも愚かに花を詠むわれ

小野雅子

サルビア

・羊

マリー・アントワネット好みしといふじやが芋の淡き花咲く
華美に倦みし王妃が愛し帽子にも飾つたといふじやが芋の花
ポストイットわづかの斜め気になりて貼り直しる梅雨まだ明けず
槍扇のあざやけき朱は梅雨の日の暗き葉叢に炎のことし
くれなるに燃えちて咲き槍扇は秋にぬば玉の実となりてゆく
サルビアの朱を競ひて夏花壇 剣の葉をもち槍扇の咲く
サルビアはわが誕生花 花言葉「燃える思い」は誰に向くべく

菊岡栄子

入梅

・鷗

遅すぎる入梅となる近畿地区早くも果てん六月の尽
入梅と共に湿度の多ければ己が体温の調節叶わず
一齊に湿度上がりて戸惑いぬ病持つ身の辛きひと日よ
急かさるる食事は思うに任せぬを殆ど食べるこのなかりき
日毎 日毎夫の届けてくるる食少しづつ食むそれのみ楽し

この町にカモメが暮らしはじめしは世紀末頃 前世紀末
好天に白ひからせてブーメランのごとき翼でどこまで行くか
川の辺に魚をとらえて柔らかくおのれの力で生きゆくらしい
鶯たちに追われてここまで逃げてきた世代重ねて二十年過ぐ
六月のカモメは空の雲のいろ保護色となし空に溶けゆく
生か死かではなく生と死と生と死と曼天のなか弧を描くカモメ
巣り空広げることく飛び立ちぬ高層ビルを断崖として

木村文子

カモメ

・羊

幼子の肌も若葉も陽光に透けてゐるがに見ゆる春の日
梅雨空のもと地球より出る蟻と地球に入る蟻のせはしき
いつものこと新聞受けに朝刊を探せど見えずけふ休刊日
一面に繁れる夏野夏草と夏草分かつ小径一本
いにしへは鎌を振るひしシルバーもいまは草刈機の音とどろかす
人間を汲み上ぐるがに観覧車今日もひねもす回りゐるなり
梅雨深しさんざくもの何もなく森はひつそり佇みてをり

國井節子 足の向くま

春

上り坂下り坂多き奈良の道すいすいとゆく電動自転車

快調に起伏の道を感じつつ滑ることく走るたのしさ

絲身を曝して走る緊張感ときにはひやりとする事もあり

わたくしの足の向くまま気の向くまま時に休んでガソリン入れる

草屋根に水車の回る音を聞く今も昭和がことことつとん

寺庭にカサブランカの鉢あまた道行く人の足を止めたり

あながち世界遺産に冠され仁徳天皇さみしからずや

小泉泰清

水無月抄

う

カナメモチの赤き若葉は真青なる繁り葉となりわが背をこゆる

人生五十、切なきを恥づの詩を吟じかへりみるなり永らふのみと

歩を数へ家の廊下を往き来て足の衰へ補はんとする

東京の雨の土砂降り映されて間なくわが地に梅雨のあめ来る

連休に植ゑられし苗はやたまし縁深まり雨に洗はる

電柱のてつべんに居て睥睨の鳥高鳴く嘲笑ふごと

雷鳴の轟きるたる夜の明けて静もりるにそら澄みわたる

河野繁子

狸

雁

ひさびさの遠出に恵まれ竹つ道の天蓋に咲く木天蓼の花
茶の花に似たる小ぶりの白きはな縁のごとく初めて出会いう

白変の葉をそよがせるまたたびの在り処遠目に何度も過ぐる

むべの花おわり実を持つ山くぼの狸は逃げずこちらを睨む

ブレーキに事故まぬがれし山翡翠の幼鳥あわてて小溝に落ちる
遠足の記憶のなかに幼き日ひとの浮かばず陵あおし

仁徳陵なつかしみつ俯瞰図の世界遺産のニュースに見入る

小西美智子 初聴

大

たからかにみんみん蟬の鳴きはじむ長雨止みて光れる空に
真夏日の近づく気配に生れいで疲れを知らぬ初蟬の声

蟬の声ういういしきを聴き得たり七十路余りの新しき夏
ベランダに蒲團干す時ふきいする汗さわやかに今年の夏の

昨年のこの日は蜂窩織炎に苦しめていき踵もつけず

人も馬も老いれば哀し競走馬頸椎骨折にこの世を去りて
「なつぞら」のドラマのなつのブラウスの生地なつかわれも着ていし

小林能子

「アーミークリーン」

羊

焼け跡に基地の明かり煌々と見ゆれば怯ゆ焼夷弾かと

歩いても帰りたかつた横浜の野澤屋が基地司令部ビルと呼ばれて

焼け原野の伊勢佐木町の真ん中の飛行場カマボコ兵舎も昔語りに

占領軍の居た横浜の思ひ出に麥哲もなき「アーミークリーン」

祈りにもにて懐かしむ元首相夫人の筆の「むくげ」一輪

耳鳴りを今朝は静むるミンミンゼミ初鳴きを聞けば梅雨もあがるか

長梅雨の明けてやうやく咲きそめし槿は空にむかひ咲き継ぐ

近藤栄昭

山々

福

尾瀬山行山に触れたく選びしに重荷となりぬいつもの緊張
まずはトイレ男と違うと主張する山行の注意事項の順序

参るべきお墓は遠き秋彼岸足元に光る栗を拾いぬ

時雨るるも温い風もつ台風か漏れる落葉に足を滑らす

七〇回登山記念と笠山に誘われ登る外秩父山

笠山はみちのくの山安積山尖る一山山並みの端
初ものの山栗小さく手間仕事渋味のまさる里を味わう

近藤芳仙 離水峰

・信

香川進の生きものの歌 12 田土 成彦

急坂の碓氷峠にのびてゐる中山道よむかし人ゆく
すげがさに草靴姿のむかし人坂本宿跡はつるあたりに
列島の東を西へつなぎたる碓氷の隧道 日清戦争の前
けはしきを登る手立てのアパート式聞けば鉄路のきざみあたらし
眼鏡橋のレンガのアーチしつくりと深山になじみ空を透かせる
新緑の峠の道の長ければ吸ひこまれつつ染まりゆきたり
急坂の碓氷峠の中継点列車まもりし熊ノ平見る

久我田鶴子 春の夜の 羊

ブリューゲルの絵の片隅に背を向けて男立てるは立小便する
春の夜の夢ばかりなるウォシユレット白き碁石をいくつも産める
安房上総照葉樹林のかがやきに精子の充ちる五月六月
なたねふぐと題して家族を詠みたるは多度津の生まれ河豚を詠まさる
母代はりに抱きくれたる姉の死にじいんじいんと時をひきだす
小鳥ゆかり小鳥あそべりと詠みたりわが目は遊ぶ活字の上を
「信頼」を「親頼」と書きしわが今日のこころの向きに驚きぬたり

・にんげんを笑うかのこと伸ぶる尾のつけ根に烏賊が二
つの目をもつ
『隱岐』より

イカは軟体動物だから貝や蛞蝓と親類関係にある動物だが水中で泳ぐ姿は優雅でスマートだ。触腕と呼ばれる二本の長い腕と八本の短い腕を持つ。この触腕を「伸ぶる尾」と表現されているが、多少の違和感があるかも知れない。しかし、歌は学術論文ではない。イカの大きな特徴として体の大きさと目の大きさの比を他の動物と比べると桁外れに目が大きい。また、イカの神経繊維はこれも他の動物と比べると桁外れに太く、神経の信号伝達の研究に大いに貢献している。それがイカの行動の敏捷性の大きな支えになっている。

さて、話を歌に戻そう。この大きな目でイカは人間社会の様な出来事を観察していたかも知れない。歌集『隱岐』の最後尾に置かれたこの作品に香川進は何を語らせようとしているのだろうか。隱岐といふこの島には、後鳥羽天皇が流されこの地で崩御する。また、後醍醐天皇も流されたが、脱出に成功し、その後の歴史の混乱の基を作った。後醍醐天皇は英雄なのかもどうかの評価はここでは差し控えておこう。イカはイカなりにそれらのにんげんの行為を「笑うかのこと」見つめていたと言うことだ。香川進の視点もこの「笑うかのこと」に集約されてい

■石のうた

地中海の塩分か速しかの磯の
小石のひとつを口にふくめば

香川進『野川以後』

一万石と二万石

佐久間 晟

早い頃、師は私に顔を近付け、耳元で囁くように得意気に、

「わしの先祖は四国高松藩で一万石の大名だったのだぞ」と。

私は「へーそうですか、奥様のお母さま（尾松静子）は、仙台伊達藩角田二万一千三百石城主の末裔ですよ」と申したら、

「ナニー、それは誰にも言うなよ」と箱口令が布かれた。

今だから明かします。その証拠にお墓は伊達一門の寺内に有ります。当時師宅に同居されていた尾松静子様は、その矜持を保っておられました。一例として、炊事などの際のエプロンは使用者がするものと申して、決してお掛けにはならず、いつも

小さな前掛けでした。

ちなみに、ご主人の尾松清一様は、長年、外国航路の機関長で、戦時は三度程、敵の攻撃で沈没させられましたが、その度生き延びた強運の持ち主で、師よりも豪胆なお方とお見受けしておりました。私が先生宅にお邪魔するたびに、寄港した港に赤いマル印が付けられた大きな世界地図を広げ、いろいろと

昔話も聞かされました。その赤マルは、世界の隅々まで彩られていきました。

「地中海」創刊の頃、発送するために地中海誌を背負って、豪徳寺駅前の郵便局に向かわれていたお姿が、今でも印象に残っています。

その頃、東京の大学生だった私の次男も、地中海誌の封筒詰めの手伝いに出向いておりました。おばあちゃん（母上様）には大変に気に入られて、「祥さま、祥さま」と言われる所以面映ゆいとよく申しておりました。私は、角田のお殿様の末裔だから仕方ないよ、と語っていました。体にとつても良い勉強になつたものと思つております。

ここで、角田市の概要を紹介しますと、宮城県南、角田盆地の北半分を占める田園都市で、中央を流れる阿武隈川が市域を二分して、肥沃な耕土を潤しています。温暖な気候と豊富な水と稻作に絶好な自然条件に恵まれ、良質な米の産地であり、養蚕・養鶏のほか果樹・野菜そして酪農・畜産も盛んな豊かな街です。この様な風土にお育ちになられたことと、静子様のあの温厚なお姿には納得のいくものがあります。

静子様を歌つた、師の歌。

・ねもごろに雀遊ばせ母はいる寒のひびきの四方にたつなか

私はこの歌が最も静子様のお姿とともに、師のお心遣いが表現されている思いがしてなりません。寒い真冬の最中、庭に寄り来る雀に餌を与えていたお姿。恐らく、小さな前掛けをされて、庭にしゃがんで雀に餌を与えていたやさしいお姿が目に見える思いが致します。心やさしいおばあちゃんまでありました。

出産

山野みなみ

りっちゃん

今月の二人

月明り深夜に爆走病院へ陣痛の汗座席を濡らす

眠られぬ夜に冷や汗夫さする早産なるか不安がよぎる

我叫ぶ分娩台に目覚めたり夫娘を抱き寄り来たる

早産にひと月早く弟に出会い娘は戸惑い笑う

出る涙娘の前止まずおろおろと不安をよそに児はただ眠る

産後うつ泣いてばかりのひと時を娘と遊ぶ花いちもんめ

泣く我をよそに微笑むみどり児よ絞り乳飲み再び眠る

腕の中乳飲み眠る嬰児に病院通い軽やか弾む

退院す日程決まり準備する不安もすべて喜びとなる

子が泣けばおっぱい与え眠れよと祈りの日々よ育児休業

声さえも機械が知らす病院の隔離病室寂しき音す

新生児管と機械につながれし隔てる壁に胸引き裂かる

親友にすべてを語りランチせし涙とさらば明日へ向かう

平成最後の夏に第二子りっちゃんを出産した。今思えば、出産から子が退院し、我が家が家族の元にやって来るまで、ドラマチックであった。ひと月も早い六月の満月の夜、眼れない私の異変に気付いた夫の機転で、三時間半かけて病院へ駆け付けた。酷い陣痛であった。後部座席で娘を抱き病院へと急いだ。直ぐに出産となつた。早産で、産後抱くこともできず、りっちゃんは保育器に入った。哺乳も悪く点滴も外せなかつた。私の胸は張り、母乳を絞って冷凍保管し持っていく日々が続いた。長く続くと胸も次第に張らなくなり悪い予感が増してきた。二週間後、大学病院のNICUへ運ばれ入院となつた。脳炎を発症していた。頭が真っ白というより、何も出来ない申し訳なさで胸が一杯になった。ただ祈るのみだった。私は身体の倦怠感も抜けず、産後鬱のような状況に陥つた。しかし娘の笑顔含め、平穏に接してくれる家族に支えられた。何より子に学び育てられ生かされていると実感した。その子も現在十一ヶ月、姉と一緒に泣きながら慣らし保育に通い始めた。また家族で力を合わせ踏み出す時が来た。でも何より、りっちゃん貴方の笑顔に救われる日々である。

■ ■ ■ 今月の二人 ■ ■ ■

目を拾ひて

藤岡みゆき

芸術に勵まされて

いつの日か海を眺めて暮らしたし潮の香をすひ目を拾ひて
なみなみとわれのこころをみたしつつ三河の湾に潮満ちきたる
雲の峰しろく輝き湧くをみつクラゲのやうに波にうかびて
透明な小さな匙ですこしづつ惜しみてすぐふ島ヨーグルト
水張田に一上山の映りて二つの峰に白き雲湧く
ビル街のはざますり抜けツバメ飛ぶ八軒家浜は潮の香のして
白ユリのたをやかに群れ六月の森はたつぶり水をふくめり
数学の教師でありし父とともに勤めし高校丘の上なる
子をまもり命削りし母のため花咲き山にあかき花咲け
ダリの絵に砂漠を駆ける女るてうつつを解かれし母に似てをり
千鳥よぶ智恵子となりたる母の見る空に天女のほほゑみてるむ
膨大なネットの海に若き母の詩集光れり真珠のやうに
哀しみの透明感の増しきたりタピオカつるんとすひて食みるる

大阪支社に参加して一年が過ぎました。
毎月短歌を詠み、歌会に出ることが大きな
励みとなっています。さて、孤独などきや
苦境に陥った時、私の支えになってくれる
のがドラマや小説といった芸術です。とく
に「大草原の小さな家」の家族の様子をみ
ると、幸せな気持ちでいっぱいになれます。
また、「赤毛のアン」シリーズも私の青春
時代のともしびでした。最近では韓国のド
ラマ「サインダン」がお気に入りです。何
気ない日常も、喜怒哀楽も、ひとたび芸術
のフィルターをかけると、見事に昇華され
てゆきます。母の残してくれた詩集のこと
ばは、今でも私を支えてくれます。私も娘
のために、短歌を残していくたらと思つて
います。牧雄彦支社長の「短歌はこれから
のあなたの人生の大きな支えのひとつとな
るでしょう」というお言葉、宝物です。短
歌という芸術のある日々に出会えたことは、
私の人生の大きな幸せのひとつだと思って
います。

◆今月の二人・山野みなみ作品評◆

泣く我をよそに微笑む

山野さんは、大分県の中津市在住。早産だった第二子の誕生をめぐるドラマを詠んでいる。

・月明り深夜に爆走病院へ陣痛の汗座席を濡らす
ドラマの始まりは緊急を要していたようだ。「深夜に爆走」、座席を濡らす「陣痛の汗」が切迫した状況を伝えている。初句の「月明り」は、字余りになつても「月明り」と助詞を入れたい。また、この状況の中で「月明り」から入るのは効果的か。

・我叫ぶ分娩台に目覚めたり夫娘を抱き寄り来たる
これは出産後の歌なのだろうか。「我叫ぶ」は、出産の際に叫んだということか、叫びつつ目覚めたということか。このままで解りにくい。下の句は、娘を抱いた夫が（ほっとしたよううに？心配そうに？）私の方に寄ってきたというのだろう。

・産後うつ 泣いてばかりのひと時を娘と遊ぶ花いちゃんめ

産後鬱のような状況になったとき、泣いてばかりだったが、お姉ちゃんになった上の子と遊ぶことで救われるようなひとときがあったのだろう。「うつ」と平仮名表記したこと、「泣いてばかりのひと時」という言葉のつながり方、少し気になった。

・泣く我をよそに微笑みどり児よ絞り乳飲み再び眠る

母親が産後鬱になっている時にも、みどり児は絞ったお乳を飲んでは眠っている。一時は保育器に入り、点滴も外せなかつたというみどり児だが、危機を脱して健やかに成長しはじめていたようだ。「泣く我をよそに」の「よそに」の中に、ほっとした思いも入り込んでいる。それは「子に学び育てられ生かされている」という実感にもつながるものだろう。

◆今月の二人・藤岡みゆき作品評◆

八軒家浜は潮の香のして

評者・久我田鶴子

藤岡さんは、吹田市在住。一連には、「三河の湾」「二上山」「八軒家浜」といった、土地につながる名詞がみえる。

・いつの日か海を眺めて暮らしたし潮の香をすひ貝を拾ひて
現在お住まいの吹田市は、海に面していない。でも、いつか海を眺める暮らしをしたいというのは、生まれ育った環境のかに海が親しくあつたからか。

・ビル街のはざますり抜けツバメ飛ぶ八軒家浜は潮の香のして
八軒家浜は、大阪の天満橋のあたり。江戸時代に京と大阪を結んだ舟の発着場で、平成二十年に再び開港した。水のにおいに潮の香。ビルの間をすり抜けて飛ぶツバメは、それを喜んでいるかのようで、それはまた、作者の思いに重なるようだ。

・ダリの絵に砂漠を駆ける女ゐてうつつを解かれし母に似てを

母はもう昔の母ではないようだ。ダリの絵の中、砂漠を駆ける女のよう、この世の束縛から解放された存在になつて

いる。次の歌では「千鳥よぶ智恵子となりたる母」とある。そういう母を、あるがままに抱きしめようとしている作者である。
・膨大なネットの海に若き母の詩集光れり真珠のやうに

ネット検索すれば、出てくる母の詩集。それは、まるで海の中の真珠のように光っている、と感じている娘。母の詩集のことばが支えてくれたように、今、自らの表現として短歌を選びとり、自分もまた娘のために言葉を残そうとしている。

一連、潮の香を恋いつつ、後半にきて、母への思いが抑え気味に表現され、末尾の歌のタピオカの味の切なさ！

私は昭和24年、当時、根治困難といわれた肺壊疽という病を得て、郡山病院へ入院しました。21歳の時でした。

そこで柳沼院長（元軍医）から

「お前ここに死ぬぞ、東京へ行つて來い。」

と、東京療養所へ転院を勧められました。そこで当時、わが国ではまだ始めて間もない肺葉切除の手術を受け、しばらく療養しました。そこでは俳句を作っている患者の多いのに驚きました。私の病室は八人部屋でしたが、何と四人が俳句を作つており、俳句の話が私のベッドの上を飛び交い、いつしか私も俳句に染まり、俳句を作るようになりました。

昭和27年、術後の体も良くなり、退所を許されました。その一年後には復職も適え、感謝と喜びでいっぱいでした。

それから教会へ導かれたが、そこには短歌に熱心な阿部泰子さん（元、地中海会員）が居られました。阿部さんは当時、「あぶくま短歌会」（公民館で伝統のある短歌クラブ）の会長をして居られました。

阿部さんは、毎年「あぶくま短歌会」の年間歌集と作品展示会の招待状を私に下さいました。展示会へは、何年か出済つていましたが、平成のはじめ頃だったと思いま

す、ようやく展示会へ行つてみました。

「あぶくま短歌会」の講師は、佐藤美枝子先生（地中海会員、逝去）でした。展示

会の作品を見て回っていたところ、佐藤先生のお歌が私の胸を強く打ち、夜になってもなかなか寝付かれませんでした。その歌ははつきりとは思い出せないのですが、西山より流れくる雲はモンゴルの騎馬軍

私と短歌との出会い

206

佐川 久光

・ 黄金の大銀杏のもとに聞きたる野外礼拝
に身の清められゆく

誕生会にて

・ バレンタインデーはわたしの誕生日あやかりて生きん愛の心もて

・ 見本林の中なる三浦記念館ほとりに白きエンレイソウの花

私は未熟な者ですが、いま目指していることは、

どう生きてきたか、これからどう生きたいか、を詠うこと。それに植物を詠うこと。

この三点です。

私は年を取りましたが、短歌を始めたのが遅かったこともあり、これからも出来る限り歌作りに励みたいと思います。

この文を書きながら、これまで生きてきたことを顧みることが出来、たいへん良かつたと思います。楽しいこともありました、病のため息の詰まるような苦しみに遇ったこと、悲しいこともありました。このようなことも歌の素材にしたいと思います。余談になりますが、私は教会関係の集いで短歌を発表する機会があります。それを記してみたいと思います。

野外礼拝にて

・ 黄金の大銀杏のもとに聞きたる野外礼拝に身の清められゆく

・ といふもので、時空を超えた幻想の世界
団か……

・ あぶくま短歌会（公民館で伝統のある短歌クラブ）の会長をして居られました。

・ 阿部さんは、毎年「あぶくま短歌会」の年間歌集と作品展示会の招待状を私に下さいました。展示会へは、何年か出済つていましたが、平成のはじめ頃だったと思いま